

子どもの被害防止セミナー

日時：2018年2月23日（金） 14：00～16：30

会場：横浜市 フォーラム南太田

主催：神奈川県被害少年サポーター連絡協議会、神奈川県警察

報告：葛山 聡

活動・支援事例紹介

SNS の利用がきっかけとなったトラブル事例に関して、(A) 被害少年サポーター連絡協議会による支援活動及び、(B) 県警本部少年育成課少年相談員による支援事例の説明。

(A) 私立高校2年生女子の事例。

- (ア) 進学校に通う A は、仲の良かった友人とは別クラスになり友人関係、成績の伸び悩み等に悩みを抱き始めていた。
- (イ) もともと生真面目で、上記の悩みなどを家族に相談すると心配をかけてしまうと恐れた A は、SNS 上で悩みをつぶやくようになった。
- (ウ) 徐々にフラストレーションが溜まっていき「病みアカウント」でつぶやくようになり、見知らぬ男性に相談をきっかけにネット上でのやり取りを行うようになった。
- (エ) その後、直接会って相談に乗ってあげるといふ男性の言葉に誘われ、両親の就寝時に家を抜け出して深夜のファミレスで食事をした。後日、男性は両親不在時に自宅にも訪れたが、弟が不審に思い母親に通報し事なきを得た。
- (オ) トラブルの内容の重大性に鑑み、警察より協議会に相談があり、A 及び両親と面談。A の悩みを両親と共有することにより問題は解決方向へ。A 自身も「なぜ軽率にも知らない人に」心を許したのかに関して反省するとともに、母親も子供の内面を理解しようと努めることで関係が改善した。

(B) 中学2年生女子の事例

- (ア) B は思春期になり自分の容姿についてコンプレックスを持つようになった。
- (イ) こうしたコンプレックスに関する相談は友人にも家族にもできないので、SNS 上で悩みを投稿すると、たくさんの人たちから励まされ相談に乗ってくれたことがとてもうれしくなり、悩みを SNS 上で打ち明けるようになった。
- (ウ) 中でも真摯な態度で熱心に相談に乗ってくれる C には、心をゆるし SNS 上で相談を繰り返すようになり、自分の一番の悩みである「小さな胸」の写真をメールしてしまった。その後、C の態度は豹変し、写真をばら撒かれなかったらと脅された。
- (エ) B は、事の重大さに気づいたが、誰にも（＝家族）知られずに解決したいとの一心から、SNS で相談した。すると、正義感の強そうな D から、「おれが解決してやるから」と持ちかけられた。B は D に解決交渉を求めて C の連絡先を教えたと、D から、「交渉して、もうコンタクトしないように約束させた。」と連絡があったが、C に絶対約束を守らせる条件として C の求めているヌードの写真を送ってくれば交渉が完了すると言われ、解決をちらつかされた B は写真を D へ送ってしまった。
- (オ) その後、C から D を介して更にエスカレートした要求があったため、B は母親に相談して事件が発覚。送信履歴等から未成年者 C（D と C は同一人物）が検挙された。
- (カ) SNS 上で親切にされていると思っていた人物に騙された痛手は大きく、事件後も本人、母親と定期的に面接を通してケアを継続している。対応が早かったことにより、幸いにも画像の流出は認められていないが、本人はそれを非常に恐れており当面ケアの継続が必要。

情報提供

警察本部少年育成課より SNS 等に係る事犯の現状に関して概要説明。（別紙資料参照）

石川結貴氏 講演

講演要旨は以下の通り

スマートフォンの急速な普及・それを通じた無料サービスに関して、使い手がついて行けていないことによって、十分なリスクが認識できていない。これがトラブルにつながっている。

SNS を介したトラブルのうち、最も多いのはイジメ。ネットでのいじめは「時間・場所」を選ばず発生し、不特定多数に拡散しやすいこと、攻撃者が集団化しやすいこと、匿名性があると誤解して発言が過激になるといった特徴を持つ。

被害を受けてしまうきっかけも、SNS の使い方の無知によることが多々あるが、加害者も同様に SNS の特性を理解していないことが多い。(安易に人を SNS 上で攻撃してしまうとその履歴は消すことが出来ないことも事実)

ネットは便利なものではあるが、万能ではない。世の中にはネット上に存在しない情報の方がはるかに多い(特に豊かに生きていくという人間の知恵といったもの)ということを生徒とは共有していくべきである。

SNS を通して犯罪やトラブルに巻き込まれた子供たち事例を取材していくと、原因は SNS にあるわけではなく、自分の心を打ち明け、本当に相談できる大人が身近にいない為に SNS 上でその悩みを発信していることに気が付く。まずは現実世界に軸足を置いて SNS を正しいコミュニケーションツールとして使っている場合は、おかしなことには不信感を持ち対処できるが、些細なことでも現実の世界から SNS へ助けを求めている人にとっては、そこでの助けの言葉は、それが偽善者の悪意を秘めたものであっても、不信感を自ら払拭して正しい対処ができなくなるようだ。

従って、子供にとって最も身近にいる大人である保護者、教師は「困ったときに相談できる大人」となれるように、本音で語れる大人として彼らの信頼を得る必要がある。

スマホが止められない子供に関して親が知っておくべきこと

- 1) 無料のアプリは広告収入もしくはマーケティング情報提供収入によって運営維持されている営利事業なので、たくさん使ってもらわないと利益が出ない。従って、たくさん使ってもらえるような仕組みが存在する。つついスマホで動画を見る、ゲームをする、占いをするというのは、こうした仕組みに誘導されているものであって、その子供が「だらしない」わけでも「自制心がない」わけでもないことを認識するべき。
- 2) 従って、単に「使いすぎない」ように小言を言っても改善は望めないなので、より具体的に使用時間・時間帯、使用目的等を子供と相談して決め、守らせることが重要。

※講演の補足資料を入手していますが、配布・転載は差支えがあるため詳細は当方までお問い合わせください。